

研究ノート

代来城の位置と現況について

市来弘志

はじめに

代来城は匈奴鉄佛部の劉衛辰が三七六年現在のオルドス地域(1)に築いた城である。しかし三九一年に鮮卑拓跋部の北魏に攻め落とされ、五世紀後期に北魏が軍事拠点として使用したものの、間もなく放棄されその位置も定かでないようになってしまった。その後代来城の位置については諸説あったがはっきりと確定はできなかった。一九八七年に戴応新氏が榆林市西方の白城台遺跡の現地調査を行ってこれを代来城と主張し、一九九一年に白城台は代来城遺址と認定された。(2)

私は二〇〇一年八月二三日にこの白城台遺跡を参観する機会を得た。代来城は、劉衛辰の子赫連勃勃が築いた統万城と共に、石灰を用いた独特の築城法で知られているが、今回その工法の様子も実見し、この遺跡の重要性をあ

らためて認識した。

そこで本稿では白城台遺跡の現状を報告し、併せて代来城遺跡の位置に関する研究史にも若干触れたい。

一 代来城の沿革

それでは先ず代来城の建設と放棄の沿革について簡単に紹介しておく。代来城を建設した劉衛辰は匈奴鉄佛部の首長で、当時オルドス一帯に勢力を持っていた人物である。匈奴鉄佛部は元来現在の山西北部に居住しており、三国西晋時期には匈奴南单于の配下にあつて、所謂山西五部匈奴の一翼を担っていた。南匈奴单于是、その祖呼韓邪单于が漢の皇室と通婚したことから、三国時代以降劉姓を称していたが、鉄佛部の首長劉氏一族も、その姓からも判るように匈奴单于の末裔である。⁽³⁾しかし西晋光熙元年(三〇六)、時の首長劉虎が反乱を起こし、西晋の并州刺史劉琨の要請を受けた鮮卑拓跋部に撃破されオルドスに逃れた。

これより先、西晋は八王の乱により内乱状態に陥り、三〇四年これに乗じて南匈奴单于劉淵が山西に「漢」を建国していた。「五胡十六国時代」の始まりである。三二二年には「漢」軍が西晋の首都洛陽を陥落させ、西晋は事実上崩壊した。鉄佛部はしばらくオルドスに逼塞していたが、三二四年に劉虎は同族のよしみもあつて、「漢」皇帝劉聡より楼煩公・監鮮卑諸軍事・丁零中郎将に任じられ、山西北部に帰還した。劉虎は三二七年に拓跋部を攻めたが大敗し、劉虎自ら单騎塞外に逃亡し部衆の一部が拓跋部に降伏するほどの打撃を受けた。劉虎と鉄佛部衆の多くは再びオルドスに逃れ、以後この地において活動していく。

劉虎は「漢」滅亡後は華北を制した後趙と友好関係を結び、三四一年には後趙と共に拓跋部を攻撃するも返り討

ちにあい、彼は間もなく死去した。劉虎の後を継いだその子劉務桓は、よく部衆をまとめてオルドスにおける勢力を築き、後趙より平北將軍・左賢王・丁零単于に任じられたが、拓跋什翼健の娘を妻に迎えてこれとも友好關係を保った。劉務桓が三五六年に死去すると鉄佛部は内乱状態に陥り、務桓の弟闕陋頭、務桓の子悉勿祈と覇権が移り変わったが、悉勿祈の弟衛辰が部衆を統一した。劉衛辰は三六一年には務桓と同様拓跋什翼健の娘を妻に迎え、拓跋部とは引き続き友好關係を維持したが、オルドスの南方閩中を支配する前秦にも好を通じていた。三六五年には拓跋什翼健が兵を率いてオルドスに侵攻、三七四年には劉衛辰は大敗して前秦に亡命した。前秦天王苻堅は衛辰に兵を与えてオルドスに送り返し、以後衛辰は前秦に臣従する。

三七六年既に華北を統一していた前秦は、劉衛辰を先導とし二十万の大軍を派遣して拓跋部を討ち、拓跋什翼健は敗死し拓跋部の勢力は一旦解体した。苻堅はこの地域を黄河を境として東西に分割し、黄河以東を劉庫仁に、黄河以西を劉衛辰に任せた。衛辰は西単于となりオルドスにおける覇権を確固たるものとした。これがオルドスにおける匈奴鉄佛部第一の全盛期と言えるだろう。劉衛辰はこの時に代來城を築きこれを本拠地とした。⁽⁵⁾

しかし三八三年に前秦が肥水の戦いに敗れ崩壊すると、鉄佛部の覇権も揺らぎ始める。かねて拓跋部に同情的だった東単于劉庫仁に匿われていた什翼健の遺児拓跋珪は、三八六年に自立し四月には魏王を称した。北魏の建国である。ここに拓跋部の勢力が再興した。宿敵拓跋部の復活は鉄佛部にとって重大な脅威であり、三九〇年に劉衛辰はその子直力鞬を派遣してこれを攻めたが敗れた。翌三九一年には再び直力鞬を遠征させるが大敗し、拓跋珪は勢いに乗じて黄河を渡りオルドスに侵攻、代來城を攻め落とし鉄佛部を徹底的に撃破した。鉄佛部衆は散り散りとなり、劉衛辰は西方に逃れたものの部下に殺され、その一族の多くも捕らえられ、拓跋珪は衛辰の首と大量の家畜を戦利品として東方に凱旋した。⁽⁶⁾

この時衛辰の子劉勃勃は追求を逃れて鮮卑薛干部、さらに鮮卑多蘭部の没奕于の下に亡命し、三九五年には当時関中を支配しオルドスにも影響力を及ぼしていた後秦より安北將軍・五原公に任じられ、その後援を得てオルドスに復帰する。彼は四〇七年には後秦より自立し、姓を赫連と改め天王・大单于を称し国号を大夏とし、初めはオルドス一円から後には関中にまで覇を唱え、東の北魏と拮抗する強大な勢力を華北西部に築き上げた。赫連勃勃が四一三年に無定河畔に築いたのが統万城である。統万城は現在も陝西省靖辺県白城子の地にその偉容を誇っている。⁽⁷⁾ 代来城が当時大夏国の領域内にあったのは言うまでもないが、史料上には全く登場しないため、どのような状態であったのかは明らかでない。

四二五年に赫連勃勃が死去すると大夏国はたちまち傾き、四二七年には北魏軍が統万城を攻略、オルドスは北魏の支配下に入った。北魏はその後も代来城を使用しており、オルドスに徙民した敕勒人が涼州に逃亡するのを防ぐため、ここに兵を配置している。⁽⁸⁾ しかしこれより後代来城は史料上に全くその名をあらわさなくなる。統万城が北魏以後元に至るまで一貫して重要な軍事拠点として史料に頻出するのと対照的に、代来城は全く忘れ去られてしまったのである。

二 代来城の位置に関する諸説

先述のように代来城は比較的早い時期に放棄され、その位置も忘れ去られてしまったようである。『水経注』等後世の地理書は言うに及ばず、史料上に全くその名はあらわれない。後に少なからぬ学者がその位置を問題にしたが、諸説紛々として定まらなかった。

胡三省は『資治通鑑』卷一百四孝武帝太元元年条の注に「代来城、在北河西、蓋秦築以居衛辰。」と記し、代来城は北河（陰山山脉南方で分流する黄河の北流）の西方にあるとする。しかしこれは統万城や劉衛辰の活動範囲とかけ離れた位置で、とても首肯できない。

願祖禹『読史方輿紀要』は代来城に言及するものの、その位置については卷三「州域形勢三」で「在今榆林衛北」、卷六十一「陝西十」では「在鎮北」と記すのみで、詳細な地点を比定していない。

楊守敬は、『水経注図』『歴代輿地沿革図』の中で代来城をウラムレン（烏蘭木倫）河上流、現在の内モンゴル自治区オルドス市エジンホロー（伊金霍洛）旗付近に比定した。楊はその根拠を記していないが、この説は後に広く踏襲された。譚其讓編『中国歴史地図集』が代来城をエジンホロー旗としたのは、やはり楊説に従ったものだろう。しかしその地に代来城に比定されるべき遺跡は存在せず、結局推定の域を出ないと言わざるを得ない。また日本では前田正名氏が代来城は統万城と同位置あるいはほど近い無定河上流に在ったはずと主張し、また田村実造氏が代来城は即ち統万城であるとの説を唱えたが、いずれも根拠を詳説していない。

これに対し戴応新氏は一九八七年に榆林市西方の白城台遺跡の現地調査を行い、その成果をふまえて白城台こそ代来城であると主張した。氏がこのように考える根拠は四つある。第一に、北魏軍の侵攻経路から見て地理的位置が符合している。北魏の根拠地である平城（山西省大同市）からオルドスに入る場合、黄河湾曲部東北の君子津を通るのが一般的だが、北魏が劉衛辰を破った時はそこを通らず遠回りして、現在の包頭付近の金津から黄河を渡った。これは君子津から白城台までの道は山岳丘陵地で攻めにくい、金津からは一面の平地で大変攻めやすいからである。この金津から白城台までの間に、現在までの所城跡は発見されていないので、白城台以外に代来城はあり得ない。

第二に、劉衛辰は北魏に敗れて西方に逃走したが、彼とその家族が捕まった場所（現在の寧夏回族自治区塩池県付近）は全て白城台の西南にあり、これは史実と地理的に合っている。第三に、北魏は後に河西（黄河以西）に移住させた敕勒人が涼州に逃亡するのを防ぐため、五原黄河北岸と代来城に兵を配置したが、これは西方への逃亡を防ぐのだから、代来城は榆林以西の無定河流域にあったはずである。第四に、白城台と統万城は色も材料も工法もよく似ている。戴氏は両者を比較し、石灰を使用し城壁はどちらも石灰色であること、四周に敦台や角楼を築き城門に瓮城があること、版築は堅固で各層の厚さも比較的近い（白城台は八十三センチ、城角部では五センチ）ことを類似点として挙げる。また白城台と統万城はわずか五十キロしか離れておらず、統万城は白城台から西南への逃走経路の途上にあり、赫連勃勃にしてみれば熟知した土地で、城を築くのには好条件であることも指摘し、根拠の一つに挙げている。

私は戴氏の示す根拠の全てに必ずしも賛同するものではない。第一の北魏の侵攻経路に関して言えば、代来城にほど近いはずの統万城を攻撃する際、北魏軍が二回も君子津を渡ったことをこれでは説明できない。第三の根拠も必ずしも十分なものとは言えない。とはいえ第二の根拠は充分首肯できるものである。またたとえ戴氏の挙げる根拠のいくつかが必ずしも十分な説得力を持たないにせよ、代来城をエジンホー旗付近に比定することはさらに根拠が薄く、全く肯定できない。さらに私は白城台遺跡を参観し、戴氏の述べるように統万城との類似性が著しい様子を実見したことから、現時点では白城台遺跡を代来城とするのが最も妥当であろうと考える。但し白城台はまだ本格的発掘が行われておらず、現在までのところ明確な年代を特定できる遺物は採集されていないため、これを代来城と確定するには至っていないが、その可能性は極めて高いと言えるだろう。

この白城台遺跡は放棄された後、オールドスの沙漠中に千数百年に渡り放置されてきたのだが、巨大な構造物であ

るためその来歴は不明でも故城址らしきものが存在しているということは、現地の人々に認識されてきたようである。光緒三十四年（一九〇八）撰の『綏遠全志』は、卷三「故城郡県考」で代来城について「在左翼界内」⁽¹⁸⁾と記すだけだが、「伊克昭盟旗故城廢州」の中に故白城という地名を挙げ「在右翼前旗内、直榆林西」と記している。鄂尔多斯右翼前旗は現在のウーシン（烏審）旗に当たり、また榆林の真西ということから、この故白城は白城台である可能性が高い。また民国十八年（一九二九）刊の『横山県志』は古蹟として白城台を挙げ「在波羅口外五十里、無定河西。城係白土、所築甚大、四門宛存」と記す。これは位置から考えても城の様子から考えても、明らかに現在の白城台である。

このように白城台は代来城としてではなく一故城址としては文献に記載されてきた。しかし本格的調査が行われなかったため、一九八七年までは来歴不明の古蹟として放置されてきたのである。

三 白城台（代来城）遺跡の現状

ここでは二〇〇一年八月二三日に私が参観する機会を得た白城台遺跡の現状について報告したい。

私は一九九六年八月に統万城を参観したが、統万城を築いた赫連勃勃の父劉衛辰の築いた代来城とされる白城台遺跡を参観する機会はなかなか無かった。二〇〇一年八月、以前留学していた陝西師範大学西北歴史環境変遷与経済社会发展研究中心の先生方から、陝西省榆林地区文物管理会主任の康蘭英先生をご紹介いただき、康先生の安排により参観することができた。

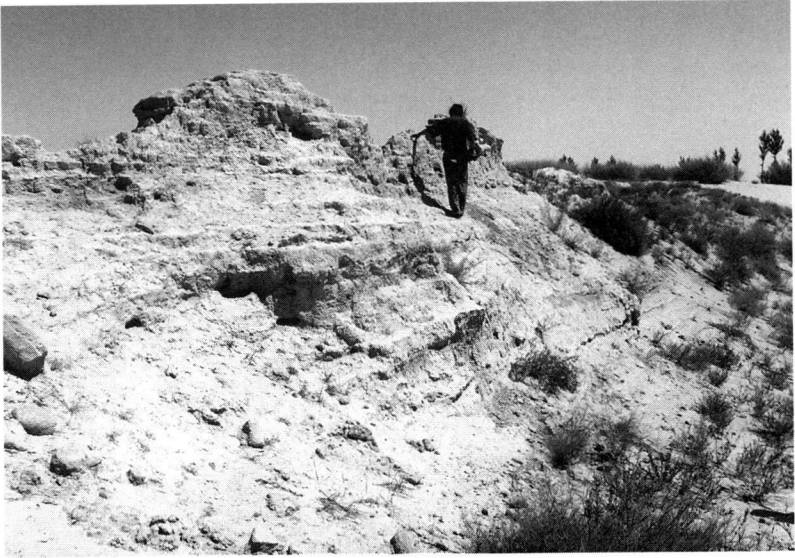
当日は文物管理会副主任の喬健軍先生と、同会研究員の周建氏が同行して下さった。喬先生は西北大学考古系の



(写真 1)



(写真 2)



(写真 3)



(写真 4)

出身で、西北大学教授だった戴応新氏が一九八七年に白城台に第一回調査を実施した際調査隊に加わった。以来現地で行われた白城台への調査の全てに参加しており、白城台は既に四回目である。

白城台遺跡は榆林市のほぼ真西四〇キロの地点にある。車は市街地を抜けるとすぐ沙漠に入る。遺跡に向かう道はまっすぐ西に延びている。街から少し離れると道は全く舗装されておらず砂利も敷いていない砂の道となる。所々穴があいており時々ひどく揺れる。運転手は巧みに穴を避けるのだが、その結果蛇行運転となり少し車酔いする。しかし喬先生の話では、一九八七年の第一回調査の頃は今よりも道が悪く、雨が降ってドロドロになってしまったという。走ること二時間あまりで巴拉素(バラス)鎮に着き昼食。昼食後出発ものの十分で白城台に着く。巴拉素鎮から道は南下し遺跡の西側に到着した。周りは本当の沙漠で何も無い。城の西側に申し訳程度にトウモロコシ畑と防砂林があるだけである。東方数キロ先に低い尾根がありそこには漢代と明代の長城がある。あとは薄い黄色の沙漠が延々と続くばかりである。

白城台遺跡は先述のように戴応新氏を中心とする調査隊が一九八七年以来二度に渡り調査し測量している。それによると城はほぼ正方形を呈し、北壁は四六五メートル、西壁は四八〇メートル、南壁は四七〇メートル、東壁は四八五メートル、壁の厚さは一二〜一五メートル、城内外が砂丘に覆われているため城壁の基底部は埋没し、壁の残高は三〜五メートル、版築の一層は八〜一三センチだが、城門部分は堅固で五センチ、となっている。

西の城門から時計回りに歩き始める。西の瓮城は比較的良好に保存されており戴応新氏も詳しく測量している。ここが城の四つの門のうち一番瓮城の残りがよい。壁自体はかなり風化しているが、黄色い砂の中から白い土塁状のものが一、二メートル突きだしている。現状でも白い土塁に囲まれた四角形の空間が確認でき、ここが瓮城であることが見て取れる。

白城台の城壁は統万城との著しい類似が指摘されている。統万城はその特異な工法で知られている。城壁は一般的に土(当地の場合は黄土)を材料とするが、統万城は砂、粘土、石灰を混ぜて水を加えたものを材料としている。これはいわばセメントに類するもので(統万城は生石灰を用いたので厳密にはセメントではないが)、単なる土に比べ遥かに強靱である。石灰に水を混ぜると膨張して熱と水蒸気を発する。『晋書』卷一百三十赫連勃勃載記はこの様子を「蒸土築城」と記している。このような特殊な材料を使用しているため、統万城は極めて堅固で現在に至るまでよく保存されている。石灰で造られているため城全体が白く、地元では白城子と呼ばれている。

白城台の城壁も白く確かに統万城によく似ている。周囲の沙漠の砂が黄色いので、壁が相当風化し砂丘に埋もれかかっている部分でも、白い色が浮き出ており城壁の跡を追うことができる。しかしそれほど固くは造られておらず、手で触るとざらざらとして削れてしまう。また色も白いことは白いが統万城のように純白に近くはなく、灰色を帯びている。おそらく石灰の量も少ないのだろう。西壁で版築の厚さを計ってみたところ、七〇センチで統万城のように緻密ではない。保存状態がよくないのはこのせいもあるだろう。喬先生のお話では、白城台の城壁は統万城同様石灰を用いているが、統万城よりは粗く作り方も雑である。ただ色については前日雨が降ったので湿って灰色になったらしく、普段はもう少し白という。

西門から北に向かうが、城壁はかなり風化し版築の芯の最も堅い部分を残して削り取られており、基層から版築の跡がくっきりと階段ピラミッド状になって残っている(写真一)。統万城の壮麗な保存状態とは雲泥の差である。城の西北角付近は風化が激しい。やはり冬の季節風の影響であろう。上に厚く砂が被さり木や草が生えていて壁は見えない。風化して壁の原形を留めず白い土塊と化している部分も多い(写真二)。北壁に行くとまた砂の中から階段状の壁が突き出している。壁の上部や日向の部分は乾いて白いが、基盤や日陰部分はまだ水を吸って灰色を呈

し、所々苔が生えているようにも見える。この付近の版築は十二センチ程度の部分もある。

西壁北壁はかなり風化しており残存部分も高させいぜい一、二メートル程度だが、北東角はかなり保存状態がよい。地上から五、六メートルも突きだして、まさしく城壁という風情である。基台の厚さも一〇メートル近い。私は喬先生と一緒に壁の上を歩いたがかなり高く感じる(写真三)。但し城壁が完全に残っているわけではなく、上部は三角錐型に削られてしまっているので、城壁の上を歩くことはできない。北東の敦台ははっきりと原形を留めているわけではなかったが、角の部分は崩壊せずに北壁と東壁がきちんと繋がっていて、九〇度の角度で城壁が角を作っているのがよく判る。

北東角から南下するとまた所々砂に埋まった部分があり、また階段状の残存部分も交互に出現する。東門の部分は残りがよい。瓮城は確認できないが城門[両脇の城壁部分とおぼしき部分がよく残り、中央の門のあるべき所だけ]ぽっかりと壁が途切れている。南壁も所々はかなり高い壁が残っている。南門も保存状態良好で、基層が厚く高さ五メートル程の壁が東西十数メートルに渡り残っている(写真四)。ただ城門付近の壁の穴にスズメバチが巣を作っていて、残念ながらあまり接近する事はできなかった。東南角から西門までの城壁はかなり風化していて、砂の上にならずばかりの白い土が顔を覗かせる程度である。

南壁まで城内に人の痕跡はなく全くの沙漠であった。城内に所々木が植林しており、東北角で枝の剪定作業をして来ていた二人の作業員に出会ったくらいのものである。ところが南東角に近づくとも城内に畑が出現し、南東角敦台上に農民が版築の小屋を造り木の柵で囲っている。どうも家畜小屋のようである。喬先生によれば、これは明らかな法律違反で遺跡破壊だが、文管会は警察ではないからどうにもできない、とのことであった。西門から見た城外のとうもろこし畑も、このけしからぬ農民のものらしい。

こうして我々は城を約一時間かけて一周した。一六〇〇年以上前に建設された城としてはよく残っていると言ふべきだろうが、かなり風化が進んでいることは明らかである。しかも陝西省の文化財行政は漢・唐に手厚く他の時代には冷淡というのが一般的傾向で、これは榆林地区でも例外ではなく、考古発掘は漢墓を中心に行われ、白城台については現在の所、本格的発掘計画も何らかの遺跡保存措置をとる予定もないことであつた。この遺跡の重要性を考えれば、遺憾千万と言ふほかにない。

劉衛辰の子赫連勃勃が築いた統万城は、その歴史的重要性もさることながら今や観光の目玉として期待され、既に統万城に至る道路は整備され、地元政府は遺跡保存措置にも着手しようとしているという。白城台にも何らかの保存措置がとられ、この貴重な遺跡が後世に末永く伝えられることを願つて止まない。

おわりに

以上代来城と比定される白城台遺跡の位置と現況について述べてきた。遺跡については文字通り参観であつて調査と呼べるような活動はしていないが、康蘭英先生によれば、この遺跡を参観した外国人は私が初めて（二〇〇一年八月現在）ということなので、その様子を報告することに些かなりとも意味はあろうと思う。

代来城は統万城の東五〇キロ足らずで、これから考えると鉄佛部の根拠地は一貫してオルドス東南部地域にあり、その活動範囲もある程度限定される。これが鉄佛部のオルドス支配にどのような影響をもたらしたかという点を今後の課題として結びとしたい。

末筆ながら、私の参観を許可し多くの便宜を図つて下さつた陝西省榆林地区文管会の康蘭英先生、喬健軍先生、

周建氏、および文管会に紹介の労をとって下さった陝西師範大学西北歴史環境変遷与经济社会发展研究中心の侯甬堅先生、李令福先生、陝西省文物局の胡林貴先生に、この場を借りて深く感謝したい。

注

- (1) 黄河上流湾曲部に囲まれた黄河右岸の地域。現在の行政区画では内モンゴル自治区オルドス(鄂尔多斯)市及び陝西省の長城以北に相当する。その名称は一五世紀末にモンゴルのダヤンハーンがこの地にオルドス万戸を置いたことに由来し、以来この地のモンゴル族は「オルドス部」と呼ばれてきた。なおこの地域は清代以来行政区画上イフ・ジョー(伊克昭)盟とされてきたが、二〇〇一年九月に盟を廃し、従来イフ・ジョー盟を形成していた一市七旗はオルドス市に改編された。同時に当地の中心都市である東勝市もオルドス市と改称した。
- (2) 艾有為・李海如「榆林調査前秦代來城址——認定是赫連勃勃幼年所居故城」『中国文物報』一九九一年第二六期
- (3) 鉄佛部の祖については諸説あるが、内田吟風『北アシア史研究 匈奴篇』同朋舎、一九七五年は、南單于一族で後漢末期に活躍した左賢王去卑としている。本文に登場する五胡十六国時代の各国の歴史についてはここでは詳述を省く。これについては、三崎良章『五胡十六国——中国史上の民族大移動』東方書店、二〇〇二年、が最もまとまった概説書であるので、参照されたい。
- (4) 「衛辰人居塞内、苻堅以為西單于、督攝河西諸虜、屯于代來城。」〔晋書〕卷一百三十「赫連勃勃載記」。「苻」堅後以劉辰為西單于、督攝河西雜類、屯代來城。〔魏書〕卷九五「鉄佛劉虎伝」
- (5) 「後魏師伐之、辰令其子力侯提距戰、為魏所敗。魏人乘勝濟河、克代來、執辰殺之。」〔晋書〕卷一百三十一「赫連勃勃載記」。「登國中、衛辰遣子直力鞬寇南部、其衆八九萬、太祖軍五六千人、為其所圍。太祖乃以車為方營、並戰並前、大破之於鐵岐山南、直力鞬單騎而走、獲牛羊二十餘萬。乘勝追之、自五原金津南渡、逕入其國、居民駭亂、部落奔潰、遂至衛辰所居悅跋城。

衛辰父子驚遁、乃分遣諸將輕騎追之。陳留公元虔南至白鹽池、虜衛辰家屬。將軍伊謂至木根山、擒直力鞬、盡并其衆。衛辰單騎遁走、為其部下所殺、傳首行宮、獲馬牛羊四百餘萬頭。」(『魏書』卷九五「鉄佛劉虎伝」)

- (7) 統万城遺跡については侯仁之「統万城遺址調査」「文物參考資料」一九五七—一〇〇、同「從紅柳河上的古城廢墟看毛烏素沙漠的變遷」「文物」一九七三—一、陝西省文管會「統万城城址勘測記」「考古」一九八一—三、戴心新「赫連勃勃与統万城」陝西人民出版社、一九九〇年、拙稿「統万城の戰略的位置について」「黄土高原とオールドス——中国西北路寧夏・陝北調査記」、勉誠社、一九九七年、所収、を参照されたい。

- (8) 「潔等固執、乃聽分徙三萬餘落於河西、西至白鹽池。新民驚駭、皆曰「圈我於河西之中、是將殺我也」、欲西走涼州。潔與侍中古弼屯五原河北、左僕射安原屯悅拔城北、備之。」(『魏書』卷二八「劉潔伝」) 悅拔城は代來城の別名である。

- (9) 「代來城と統万城が同じ位置に築かれていたか異なつた位置か不明であるが、たとえ位置が異なつていてもそれほど遠く離れていないと考えられる。」(『平城の歴史地理学的考察』、風間書房、一九七九年)

- (10) 田村実造「中国史上の民族移動期」創文社、一九八五年

- (11) 前掲「赫連勃勃与統万城」「代來城故址考古記」

- (12) 北魏は四二六年と四二七年にオールドスを攻撃し、四二七年には統万城を攻略しているが、この際二回とも君子津を渡っている。

- (13) 伊克昭盟鄂尔多斯左翼前旗・中旗・後旗の境域内。現在のエジンホロー旗、ジュンガル(准格爾)旗、ダラト(達拉特)旗に当たる。明らかに白城台遺跡とは異なる。

- (14) この時私は陝西歴史博物館主催の「中国西北專線考察」団に参加しており、団として參觀に訪れたものである。この調査の行程及び成果については、前掲「黄土高原とオールドス——中国西北路寧夏・陝北調査記」を参照されたい。

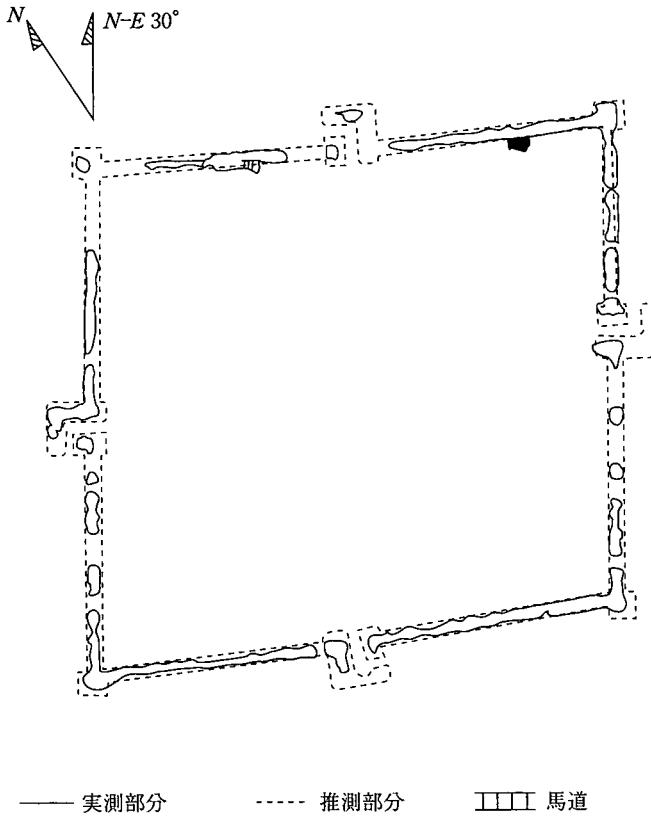
キー・ワード 代來城 白城台遺跡 匈奴鉄佛部 劉衛辰

統万城



<オルドス周辺地図>

譚其驥主編『中国歴史地図集』（地図出版社、一九八二年）を基に作成



白城台遺跡平面図（戴応新『赫連勃勃与統万城』より）

Location and Existing Status of Dai lai castle

Hiroshi ICHIKI

Key words: Dai lai castle, Bai cheng tai ruins, Xiongnu tiefo tribe, Liu weichen, Tongwan castle

Dai rai castle was built by Liu Weichen of Xiongnu tiefo tribe in 376 A. D. in present Ordos area. Liu weichen dominated Ordos area based on this castle. In 391, the castle was fallen and abandoned by attacks of Xianbei Tuoba tribe. After that, the location of the castle was not clear.

Yang Shoujing elaborated on a location, Which was in and around Yijinhuoluo of Ordos in Inner Mongolia.

However, it was not enough grounds.

In 1991, the Civilization Bureau of the Chinese Government authorized a theory of Dai Yingxin that the castle is the ruins of Baichengtai in Yulin-City, as a result of his field survey in 1987.

I inspected the Baichengtai ruins on August 23rd 2001. I think it is an adequate theory as of today that Baichengtai ruins are the Dailai castle, considering special construction method by using lime, Characteristics of castle walls, and geographical location.